

# 地域における保育園との連携による食育実践に関する調査研究

坂 本 裕 子      中 島 千 恵  
浅 野 美登里      落 合 利 佳

保育園のアンケート調査に加え、幼教と食栄の学生が共に園で食育実践に取り組み、相互理解や連携力、実践力の向上を図った。食育基本法施行後、園では食育活動が増え、保育士と栄養士の連携、栄養士の子どもへの関わりが増したことが示された。食に関する知識を深める教育や栽培活動、調理体験を増やし充実させる方向にあり、養成校に食の知識を持ち自身の食生活を考え、実践や体験的取組のできる人材の養成が期待された。

キーワード：食育実践、保育園、栄養士と保育士の連携、養成校

## はじめに

平成17年に食育基本法<sup>1)</sup>が施行され、保育所等では様々な食育活動が推進されている。そして、平成21年度には「保育所における保育指針」<sup>2)</sup>が改定され、乳幼児に対する保育所の役割が明確にされた。そこでは「保育所における食育に関する指針」が新ためて取り上げられ、食教育をはかることの重要性がうたわれている。保育所においては園長を初め、保育士、栄養士、調理員等の職員間の連携をはかり、保護者支援にもつながる食育の一層の推進が求められている。

これまで、栄養士は単に栄養や給食管理に終了することが多く、一方、保育士は食の重要性についての学びが少なかった。今回改定された保育所指針においては、明確に保育士、栄養士等職員間の連携の必要性が述べられており、両者に幼児の食の問題に対する洞察力を身につけ、連携に必要なコミュニケーション能力の向上を図ることなどが強く求められている。保育

の質を上げるためにも、保育士、栄養士は共に十分な食に関する知識をつけ、知識を効果的に生かす実践力が要求される現状である。

本研究では保育所との連携をはかることにより、保育士と栄養士養成課程の学生の食育に関する実践力の向上を図ることを目的としている。これまで我々は保育士、あるいは栄養士を目指す学生に対し食に対する意識を高め、食育実践能力を支援するためのプログラム構築を目指し、さまざまな研究、実践を行ってきたが<sup>3～11)</sup>、この研究においては実際の現場における実践力、連携力の向上により重点を置いた。

食体験のモデルが家庭や地域から急速に失われつつあり、保育園での意識的な食教育の意義は、園児、保護者はもちろんのこと、実践者となる学生自身にとっても大きい。また、先人の知恵が蓄積される伝統食やそれに伴う生活文化の継承も家庭においては減少傾向にあり、学生自らも学び直す必要がある<sup>12, 13)</sup>。そこで、保育園を対象としたアンケートから得られる現状と、保育士・栄養士養成課程の学生の実践を通して見られる保育所における食育活動から、今

後の在り方等の検討を行った。

## 方 法

### I. 保育園を対象にしたアンケート調査の分析

#### 1. 調査対象、時期、方法

前報<sup>11)</sup>と同じ保育園アンケートを用いた。調査時期は平成20年9月、郵送でアンケート用紙を配布後、無記名式で返送、回収をおこなった。京都市を中心に151園（有効回収率は44.0%）の分析結果である。

#### 2. 検討内容

調査内容のうち、今回は食育実践の状況等の項目について集計を行い、検討した。

質問項目は食育実践の有無や企画、実践者、食育基本法施行後の取組みの変化、食育基本法の施行後に食に関して見られた変化、保育園で特に力を入れている食育活動、養成校に期待することなど園の食育状況を問うものである。

食育実践については配膳指導、調理体験、栽培活動、食に関する知識を深める教育、食事マナー、郷土料理や産物に親しむ体験の6項目を尋ねた。

保育園で特に力を入れている食育活動と養成校に期待することの質問については、回答を自由記述で求めたもので、124園および96園から回答を得た。保育園で特に力を入れている食育活動については、複数ある自由記述の内容を6つの実践項目に分け、親子活動、地域の人との活動、その他の3項目を加えて、9項目に分類した。

### II. 地域の保育園における食育実践活動

#### 1. 実践対象、時期

短大近辺の保育園2園に連携協力を依頼し、学生の実践提供の場を得た。幼児教育専攻と食

物栄養専攻2回生のゼミ生29名が、21年度に年間を通して食育に関する活動を行った。

#### 2. 実践方法

幼児教育、食物栄養専攻の学生がお互いを理解し、実践活動を円滑に行えるように、全体を4グループに分け交流を図ることとした。

前期は主に、食育実践のための準備学習を行った。栄養士は子ども理解が、保育士は食の知識が不足気味であるため、双方向で学び合う場をゼミ時間に設けた。また、実践現場の理解のために順次、保育所参観をおこなった。

後期に入り、2つの保育園で食育の実践および参観を行い、最終に合同の実践報告会を持った。

## 結 果

### I. 保育園を対象にしたアンケート調査

#### 1. 食育実践の状況について

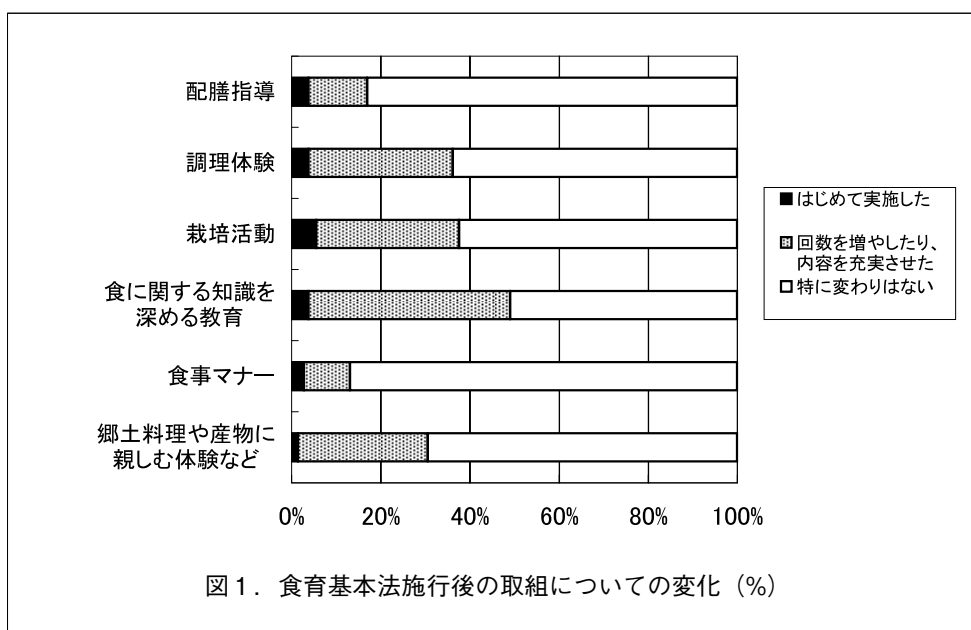
表1に見られるように、食育実践をしていると答えた園は、配膳指導で91.4%、調理体験で92.1%、栽培活動で96.0%、食に関する知識を深める教育で93.4%、食事マナーで97.4%、郷土料理や産物に親しむ体験で66.9%であった。およそ9割を超える園がこれらの項目についてはすでに実践を行っていたが、郷土料理や産物に親しむ体験についてはやや少なく7割に達していなかった。

#### 2. 食育基本法施行後の保育園での取組みに対する変化（図1）

食育基本法施行後、保育園での食育実践の取組みに変化があったのであろうか。それぞれの実践項目で、施行後に初めて実施した園は少ないながらもあり、その中では栽培活動に初めて取り組むという園が5.5%で多かった。

表 1. 保育園における食育実践の有無

実践項目	(%)	
	有	無
配膳指導	91.4	8.6
調理体験	92.1	7.9
栽培活動	96.0	4.0
食に関する知識を深める教育	93.4	6.6
食事マナー	97.4	2.6
郷土料理や産物に親しむ体験	66.9	33.1



また、回数を増やしたり、内容を充実させた項目でもっとも多かったものが、食に関する知識を深める教育で45.3%であった。調理体験は32.4%、栽培活動は32.1%、郷土料理や産物に親しむ体験は29.2%、配膳指導は13.2%、食事マナーは10.3%で、食事マナーや配膳指導はこれまでと変わらない園が多かった。

### 3. 食育基本法の施行後に食に関して園で見られた変化について

表2に見られるように、食育基本法施行後に約半数の園で、食育活動の企画が増えた(51.0%)、食育に関する研修会に園からの参加が増えた(50.3%)、栄養士や調理師の子どもと

表2. 食育基本法施行後の保育園における変化

項 目	あてはまる	回答数	割合 (%)
a. 保育士と栄養士が連携する機会が増えた	はい	71	47.0
	いいえ	80	53.0
b. 食育活動の機会が増えた	はい	77	51.0
	いいえ	74	49.0
c. 保護者の関心が増した	はい	30	19.9
	いいえ	121	80.1
d. 地域との連携が増えた	はい	11	7.3
	いいえ	140	92.7
e. 食育に関連する研修会に園からの参加が増えた	はい	76	50.3
	いいえ	75	49.7
f. 職員の食に対する意識が高まった	はい	69	45.7
	いいえ	82	54.3
g. 栄養士や調理師の子どもとの関わりが増えた	はい	72	47.7
	いいえ	79	52.3
h. 施設・設備の充実を図った	はい	18	11.9
	いいえ	133	88.1
i. その他	はい	19	12.6
	いいえ	132	87.4

の関わりが増えた（47.7%）、保育士と栄養士が連携する機会が増えた（47.0%）、職員の食に対する意識が高まった（45.7%）というような変化が見られた。保育士や栄養士などの園関係者間の連携、食に対する意識、活動機会が増加している一方で、施設・設備の充実を図ったり、地域との連携、保護者の関心には大きな変化は見られず、1～2割程度であった。

#### 4. 保育園で特に力を入れている食育活動について（図2）

特に力を入れている食育活動で最も多かったのは栽培活動（67園）で、次いで調理体験（60

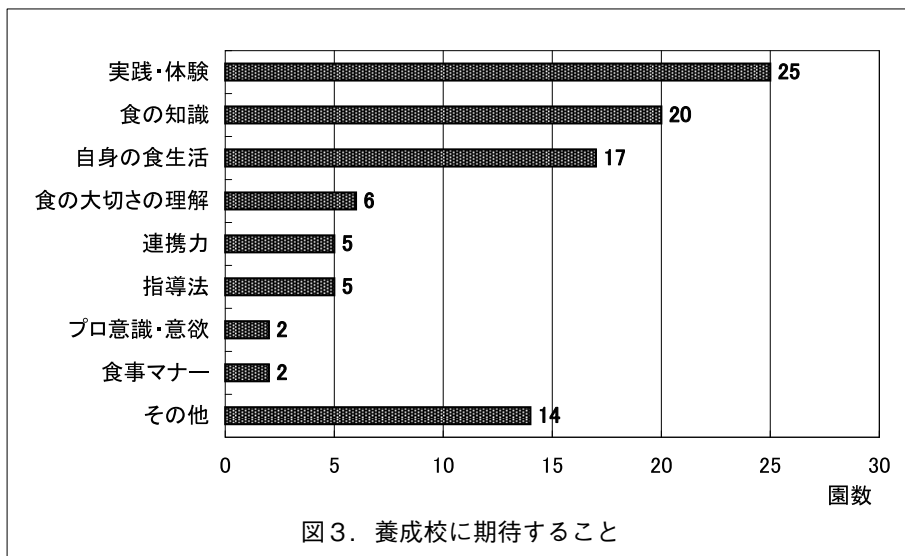
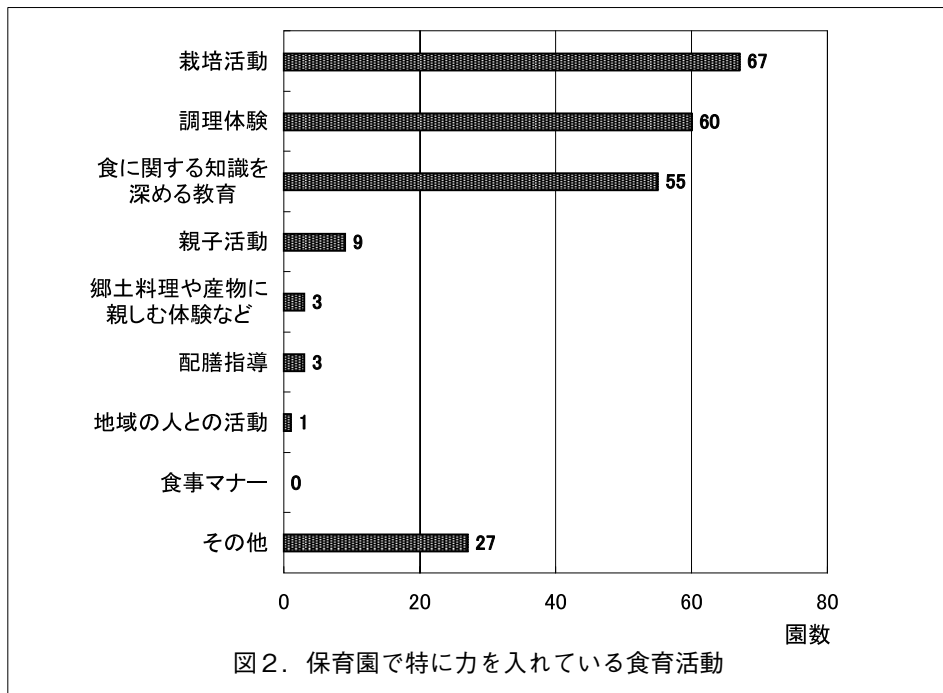
園）、食に関する知識（55園）が全体の中で多くみられた。親子活動に力を入れている園は9園、地域の人との活動は1園のみであった。

その他には、和食給食の実施、弁当日のお弁当の見直し、食を通した異年齢の関わり、「生活展」での展示や試食などの回答があった。

#### 5. 養成校に期待すること

保育園が保育士、栄養士養成校に食育活動に関して期待していることを分類したものが図3である。

食に関わる実践や体験的取組みが最も期待されており、2番目に食に関わる知識の獲得、3



番目が学生自身が自身の食生活に関心を持ちよりよい食生活を実践していくことが期待されていた。

期待される実践・体験の具体的な内容を個別

に見ると、栽培に関する体験や実践を望む声が多いものの、単に技術や知識だけでなく、栽培を通して思いやる気持ちや栽培体験の豊かさが望まれていた。また、調理体験とそれに関わる

知識の獲得が期待され、栄養士、保育士ともに調理作業の手早さを身につけることが求められていた。また、子どもや保護者が楽しめる食育実践が望まれていた。

食の知識の具体的な内容は、食材や栄養に関する知識、乳幼児の食に関する知識や食の安全、除去食に関する知識等であった。

## Ⅱ. 地域の保育園における食育実践活動

### 1. 学び合うための合同ゼミの実施

前期、中島ゼミは「3～5歳児の発達の特徴」、「子どもの生活上の問題など」、浅野ゼミは「3～5歳の子どもの望ましいおやつ」、坂本ゼミは「子どもの食の問題」について各ゼミで調べてまとめたものを、皆の前で発表し、理解が深まるよう説明を行った。

合同で行うことで、専攻間での関心の違いや理解の違いが明確になったが、このことについてはこのような機会があったので、栄養士、保育士双方の違いが認識でき、相互理解に繋ぐことができた。

また、後期の最終に合同の実践報告会を持った。

### 2. 保育園における食育の実践

(1) 中島ゼミは、2つの保育園でそれぞれ食育劇を行った。

#### ①「J」保育園

タイトル：月ようびはなに食べる？

目 的：野菜の良さを知って、好き嫌いをなくす

上演時間：15分

エリック・カールの絵本「月ようびはなに食べる？」を参考にして、学生がストーリー、振り付け、音楽、食育媒体等資料の作成すべてを自分たちで行った。

#### ②「I」保育園

タイトル：どうぞのいす

目 的：季節の旬の野菜を知ってもらう

上演時間：15分

香山美子の絵本「どうぞのいす」を参考に、テーマにあったストーリー、野菜の媒体、振り付け、音楽などをすべて学生が考え作成した。

実施した両保育園での反響は大きく、食育劇の実践や園との交流を通しての学生の学びは大きかった。実際に相手の状況を理解し、それに合わせて行う必要があり、困難さと同時に達成感が得られた。

(2) 浅野ゼミ、坂本ゼミでは主にレシピ集の作成、配布を行った。

①浅野ゼミはレシピ集作成を通して、子どもにとって望ましいおやつとはどのようなものであるかを学生自身が考え、保護者にも参考にしてもらうことを目的に、レシピ集「保育園児が喜ぶおやつ」を作成し、2つの保育園で配布した。

②坂本ゼミでは、噛むことが少なくなっている現在の食生活で、噛むことの重要性を保護者に認識して貰い、噛むことができる子どもたちを育てるためのレシピ集「かみかみレシピ」を作成し、2つの保育園の保護者、保育園関係者に配布した。

レシピ集作成に先立ち、子どもの食の現状や噛むのが苦手な食材を調べ、レシピ集に反映させるために、①保護者向けにアンケート調査を行った。集計結果については、先に保護者、保育園に報告した。また、②4～5歳児を対象に野菜の好き嫌いについての聞き取り調査を行い、その結果を基に野菜嫌いをなくすためのお話し会を持ち、食育の実践活動を行った。

両ゼミのこれらレシピ集作成、配布は、学生

の実践力養成の一環として、また同時に保護者に対する支援活動<sup>14)</sup>の一つとしても位置付けた。

食物栄養専攻の両ゼミ生にとっては子ども理解も十分でなく、保育現場に初めて足を踏み入れる状況からのスタートであった。しかし、実践現場からの学びは得難いものであった。

## 考 察

前報<sup>11)</sup>では保育園の現状調査のうち、栄養士の配置の観点から保育園における食育実践について検討し、企画や実践で保育士の食育への取組みが目立ち、献立作成はもちろんのこと食育実践にも積極的に関わられる栄養士の養成が急務であることを報告した。

今回は改定保育所指針において明確化され、保育士と栄養士に一層の食育の推進が求められていることから、食育の実践力養成の観点に立ち取り組んだ。今後、教育課程の中で連携力の強化が望まれ、現場との双方向型の教育の在り方がより問われていくと考える。

平成17年に「食育基本法」が制定され、小学校における栄養教諭の創設をはじめ、地域における「食育推進計画」が進められ、国民をあげて積極的な食教育の充実がはかられている。我々は平成19年度より保育士と栄養士養成において、食育実践をはかれる人材の育成を目指してきた。

保育士養成校の学生は卒業後、保育士として幼い子ども達の食育を推進する重要な仕事に携わるだけでなく、同時に将来母親として適切な食習慣を家庭の中に定着させていく大きな役割を担う可能性が高い。しかし、保育士となる学生の食習慣は必ずしも望ましいものではなく、食の学びも少ない現状である。また栄養士

を目指す学生においても、近年、家庭で食事を作る経験が少なく、知識と実践が結びつかない者が多い。そこで保育士のみならず栄養士についても食育実践が自身の食生活の振り返りに繋がり、保育の場で必要であることから、食に対する意識を高め、より豊かな知識や実践力の育成につながる教育プログラムの構築を目指した研究を進め、その成果について報告を行ってきた<sup>4～10)</sup>。

保育園では保育所指針を受け食育の推進を行うため、食育の年間計画の作成がされているところもある。しかし、実際には取組みの現状には大きな違いがあり、今回の2つの園での実践を通して初めて分かることであったが、違いの実態に即した対応力が求められた。食育実態の現状把握を行った上で、将来の生活習慣病の予防もこの時期からはかることが重要であり、食の安全はもちろんのこと、将来にわたる継続的な健康教育の提供を目指す必要がある。

表1で示された食育実践の結果の有無は、食育基本法が施行される以前から、家庭とともに保育園でも当然のこととして食についての教育はなされてきたことを示している。しかし、それは保育士を中心に毎日の保育生活の中で行われてきたことが大きい<sup>13)</sup>。社会のありようが変わり、これからは全職員の協力が求められている。

食育基本法施行後、保育園では食事マナーや配膳指導は既に行っていたとして、食の知識を深める教育や栽培活動、調理体験へと深まる傾向がみられた。そして、食育が保育士、栄養士等職員全体で取り組むべきものとされ、実際にアンケート調査からも連携機会や活動機会が増えたとされる。栄養士には給食の管理のみでなく、今後、子どもの実際の姿を見て、発達段階にあった食育の実践が強く求められる。

実際に保育園が養成校に期待することとして、食に関わる実践や体験的な取り組み、食に関わる知識の獲得、学生自身が自身の食生活に関心を持ち、よりよい食生活を実践していくことがあった。しかし単に技術や知識が望まれているのではなく、思いやる気持ち、体験の豊かさが望まれているのである。養成校としては知識、技術に偏らない実践力の養成を目指さなければならない。

また、同じように食育実践を行う者としての保育士、栄養士の養成であるが、専攻の違いを見てみたい。保育士養成が保育園および施設の保育士を養成するというかなり限定された年齢層を対象としてきたのに対し、栄養士養成においては対象が胎児期から高齢期までの各ライフステージ、および臨床場面の食も扱う。栄養士としての配属先は多様であり、保育園のみに限定されない教育を行うことが求められる現状がある。

しかし、人生の全世代にわたり食育を行うことが必要ではあっても、やはり子どもの頃の食育が一番肝心ではないだろうか。これまでの研究成果<sup>4~10)</sup>から、教育による行動変容は家族一緒に食事の大切さを意識し、家庭における食体験がある者に容易に行われる傾向にあった。したがって、子どもの頃に望ましい食習慣を身に付けることがもっとも大切である。今回のような食育実践が学生自身や特に保育従事者、保護者への気付きに繋がることを望まれる。

また、今回年間を通して実践活動を行うことを目標にしたが、学生は授業、実習等で忙しく、他方、保育園には学生との生活時間に違いがあった。

学び合うための合同ゼミの実施では、学生は各専攻の取り組み方に感心し、お互いにないものを肌で感じていた。しかし、普段からのつき

あいがない中、急には難しいものがあった。特に栄養士専攻の学生は伝えるということに慣れていないため、困難があったようである。卒業生を追跡調査した結果<sup>10)</sup>に、知識を伝える技術が未熟であるとの指摘があったことから、改善を図りたいことである。

一方、現場での実践は保育士と栄養士養成の学生がまず連携をはかることから始まったが、そこには教室での講義にはない学びがあり、共に学びあう姿勢から、いかに知識を実践へ結びつけていくかを自ら深く体得することが可能になると考えられた。

子どもの育ちで大切なことは「遊・食・眠」であろう。これまで当たり前のこととして為されてきた食べるということが、現在の社会の状況から難しくなっていることを知り、生活の中での食の重要性を考え、得た知識をどう活用するか、どのように伝え、実践するか。考え、実践できる人材養成が今後求められている。

最後になりましたが、本調査にご協力いただきました保育園の皆様へ深謝いたします。

なお、本研究は京都文教短期大学特別研究助成を受けて実施したものである。

#### 参考文献

- 1) 内閣府：食育基本法（法律第63号）、官報号外第134号（2005）
- 2) 厚生労働省：保育所保育指針解説書（2008）フレール館、東京
- 3) 浅野美登里、坂本裕子、落合利佳、中島千恵：栄養士、保育士養成課程に学ぶ学生の食に関する実態、京都文教短期大学研究紀要 第46集、pp20-30（2008）
- 4) 中島千恵、坂本裕子、浅野美登里、落合利佳：女子短大生の食意識の構造—食に関する知識レベルに着目して—、京都文教短期大学研究紀要 第47集、



- pp76-89 (2009)
- 5) 落合利佳、中島千恵、坂本裕子、浅野美登里：調査報告・保育士養成課程に学ぶ学生の食に関する実態調査、保育士養成研究 第26号、pp87-95 (2009)
  - 6) 中島千恵、坂本裕子、浅野美登里、落合利佳：女子短大生の食意識に関する分析—意識と知識の関係、関西教育学会年報 通巻第33号 pp.145-149 (2009)
  - 7) 落合利佳、中島千恵、浅野美登里、鳥丸佐知子、坂本裕子：短大生の食意識の変化に関する分析 (2) 大学での教育実践とその有効性について、全国保育士養成協議会第48回研究大会 発表論文集、pp40-41 (2009)
  - 8) 中島千恵、坂本裕子、浅野美登里、鳥丸佐知子、落合利佳：ライフスキルの伝達者を育てる—大学における食育の成果は？、第56回日本学校保健学会講演集、pp40-41 (2009)
  - 9) 浅野美登里、坂本裕子、落合利佳、鳥丸佐知子、中島千恵：学園祭における食育の実践—保育士、栄養士をめざす学生の取り組み—、京都文教短期大学研究紀要 第48集、pp129-134 (2010)
  - 10) 中島千恵、坂本裕子、浅野美登里、落合利佳：教育・食物栄養・医療の連携による食育実践能力を高める保育士養成プログラムの構築、科学研究費補助金研究成果報告書、京都文教短期大学、298頁 (2010)
  - 11) 坂本裕子、中島千恵、浅野美登里、落合利佳：京都府南部の保育所における食育状況、京都文教短期大学研究紀要 第48集、pp.21-29 (2010)
  - 12) 藤沢良知：食育の時代 楽しく食べる子どもに (2005) 第一出版、東京
  - 13) 江原絢子編：食と教育 (2001) ドメス出版、東京
  - 14) 駒田聡子：保育士アンケートから見た食育の現状と課題、食生活研究、29 (3) 29-41 (2009)